対人援助関係におけるインボルブメント

関連するSDGsの国際目標



人間看護学部　人間看護学科　　教授　　牧野　耕次
研究分野：精神看護学

概要：
　インボルブメントとは、遺伝子や細菌、栄養素、細胞などの実態を伴う物質、もしくは因子や要因など物質を伴わないシステムなど他のシステムと関係を持つ関与の意味で使用されている。本来、2つ以上の変数が関係しあう場合に使用される用語である。

　看護では、「巻き込まれ」や「かかわり」「関与」などと訳されているが、インボルブメントは臨床看護師にまで、定着している用語とは言い難い現状がある。看護師が患者とかかわる場合、知らない間に感情的に巻き込まれていることに気づく必要がある。もし気づかなければ、看護師が持つ感情や思考、価値観、責任と、患者が持つ感情や思考、価値観、責任との間で、「押し付け」など、様々な問題が生じる。

　精神科の看護師は、知らずしらずに巻き込まれた経験を振り返ることで、かかわり巻き込まれることとはどういうことなのかを実体験から体得（スキルを習得）していることを、私たちは示唆した。さらに、精神科の看護師は、そのふりかえりの経験を活かすことで、意図的にかかわり巻き込まれながら看護していることも示唆してきた。

　このインボルブメントは、看護だけのスキルではなく、教員や弁護士などの対人援助職、もしくは子育てや介護などの役割遂行にも応用可能な概念である。コミュニケーション理論は、客観的な枠組みにより、店舗の接客や接遇などのマニュアル的な対応には非常に有効である。しかし、かかわる際に、互いの感情や思考、価値観、責任などがかかわりに反映し、多様で複雑なかかわりが必要な関係性の場合にはマニュアルによる対応には限界がある。そのような場合、インボルブメントは非常に有効な枠組みとなる。

　互いの感情や思考、価値観、責任などの境界（バウンダリー）をインボルブメントの中で調整することで、それぞれの納得のできる結果にそれぞれが主体的に導いていく可能性が開かれる。虐待や各種ハラスメント、いじめや孤独など、現代の多くの問題に対するキー概念として、インボルブメントが注目され重要となる時代が必ず来ると思われる。

　インボルブメントは、見えない境界（バウンダリー）を自覚するなど意識しながら扱う必要がある。それは、誰もがほとんど無意識に、時に意識して行なっていることである。

　今後私たちは、かかわりの中で、誰もが境界を意識し、扱うことができるようになるような研究をしていくことが求められている。